



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society



Newsletter



2024.01

vol. **21**

002 理事長あいさつ

003 新監事あいさつ

003 新代議員あいさつ

007 第50回日本肩関節学会学術集会を終えて

009 第51回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ

010 第52回・53回日本肩関節学会学術集会のお知らせ

011 肩関節外科医を志す人達へー肩の魅力を語る (名誉会員 黒田 重史)

014 受賞報告

“Pioneer of Shoulder and Elbow Surgery”として表彰されました (名誉会員 高岸 憲二)

016 学術論文紹介

第36回 (第49回日本肩関節学会) 高岸直人賞受賞 基礎論文 (上原 弘久)

017 **トラベリングフェロー帰朝報告**

KSES-JSS トラベリングフェロー帰朝報告 (原田 洋平)

KSES-JSS トラベリングフェロー帰朝報告 (長谷川 彰彦)

021 **各委員会報告**

雑誌「肩関節」編集委員会

国際委員会

高岸直人賞決定委員会

社会保険等委員会

教育研修委員会

学術委員会

広報委員会

財務委員会

定款等運用委員会

リバース型人工肩関節運用委員会

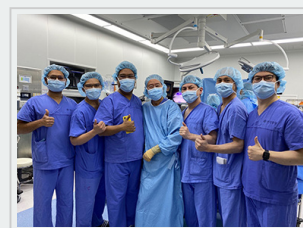
選挙管理委員会

50年史編纂委員会

用語委員会

032 事務局からのお知らせ

032 編集後記



理事長あいさつ

一般社団法人 日本肩関節学会 理事長 菅谷 啓之

2022年10月6日に第5代理事長を拝命してから既に2期目の新年を迎えました。この間、2023年の第50回日本肩関節学会が東京・新宿の京王プラザホテルにて、池上博泰会長のもと盛会裏に終了することができました。2020年以降猛威を振るった新型コロナウイルス感染症が、2023年5月に感染症5類に分類されたため、2019年の第46回学会以降初めてコロナの影響を全く受けずに通常開催された学会でした。この3年に渡るコロナ禍の間、我々はオンラインミーティングの便利さを知る反面、長年の友人たちとface to faceで議論や飲食のできる喜びを大いに感じる事ができました。一方、この第50回の学会後、副理事長の橋口宏先生が一身上の都合で理事および代議員を退任されました。ここで、社会保険等委員会やリ



バース型人工肩関節運用委員会など橋口宏先生の長年にわたる日本肩関節学会への多大な貢献に敬意を表したいと思えます。後任の副理事長には菊川和彦先生に就任して頂き、また財務委員会担当理事には伊崎輝昌先生、社会保険等委員会担当理事には高瀬勝己先生に新たに担当して頂くことになりましたので、ここにご報告申し上げます。

さて、海外へ目を向けますと、コロナ禍に代わり、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルの対ハマスのガザ地区侵攻、不穏な東アジア情勢などの国際的懸念が拡大しつつあります。これらに加え未曾有の円安で、日本から海外への渡航費はコロナ前に比べるとかなり割高になっております。この円安による影響で、日本肩関節学会でも学会費に含まれるJSESの購読費が円安により高騰し学会における財務への圧迫が大きな問題となっておりましたが、JSES editorの1人である今井晋二先生のご尽力でJSESと交渉し、当面1ドル120円換算で対応して頂けるようになりました。今井晋二先生のご尽力にこの場を借りて感謝申し上げます。国際交流には円安や紛争により厳しい状況ではありますが、本年は3月のKSESと7月のTOSSM (Thai Orthopedic Society for Sports Medicine) では日本がguest nationとなっております。学会員の皆様には常に国際的視点を持って活動して頂きたいと思えます。

最後に、50周年を迎える秋の京都での第51回日本肩関節学会も今井晋二会長のもと着々と準備が進められております。記念すべき節目の学術集会が昨年以上の大盛会となりますよう、皆様どうぞ御協力の程お願い申し上げます。

新監事あいさつ

監事 塩崎 浩之

このたび、日本肩関節学会の監事に就任させていただくことになりました。私は1986年に新潟大学を卒業し、日本肩関節学会には1990年に入会しましたが、当時の会場はひとつのみで、白熱した討議が交わされていたことを鮮烈に覚えております。2016年から代議員を務めさせていただき、これまで雑誌「肩関節」編集委員、学術委員として活動してまいりました。同時に、学会が理事・代議員の皆様の献身的な活動により運営されている状況を目の当たりにしてまいりました。



先日、監事として理事会に初めて出席いたしました。菅谷啓之理事長のポジティブなリーダーシップのもと、各理事がバランス良くそれぞれの責務を果たしており、仮にどんな難局・難題があろうとも適切に乗り越えていける明るい未来を感じ取りました。

監事といたしましては透明性と公正性を重視し、微力ではありますが、学会の健全な発展をサポートしていく覚悟でおります。会員の皆様のご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

新代議員あいさつ

代議員 一ノ瀬 剛

このたび、日本肩関節学会の代議員に選出いただきました一ノ瀬剛と申します。

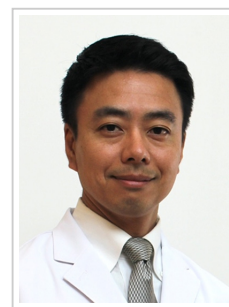
私は2006年3月に群馬大学医学部を卒業後、2008年に群馬大学整形外科に入局しました。高岸憲二名誉教授、山本敦史先生、小林勉先生、設楽仁先生のご指導の下、2008年の第35回日本肩関節学会（大阪）で学会発表を行ったことが肩関節外科医を目指すきっかけとなりました。その後2010年に大学院に入学し、ラットの腱板を用いた基礎研究で学位を取得、2014年から群馬大学医学部附属病院整形外科で肩関節外科医として多くの腱板、脱臼、人工関節症例の手術を行ってきました。2019年からは現在の高崎総合医療センター 整形外科に異動し、肩関節疾患に加えて四肢外傷の治療にも携わっております。



非才の身ではありますが、日本肩関節学会の発展に少しでも寄与できるよう、努力していきたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

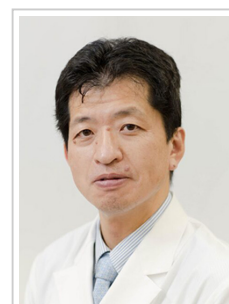
代議員 木田 圭重

この度、後藤英之先生と船越忠直先生にご推薦いただき、日本肩関節学会の代議員に選任いただきました京都府立医科大学の木田圭重と申します。2017年から大学病院で肩関節の臨床、研究、教育を担当しています。私は野球に明け暮れた小・中・高校時代を経て2004年に京都府立医科大学を卒業しました。京都府立医科大学の肩関節グループの諸先輩方にご指導いただき、上肢のスポーツ障害の治療を学びたいという動機で2007年に本学会に入会しました。以来、多くの先生方に学会場や懇親の場を通して教を頂いて参りました。先達が築かれた土台と、オリジナルな仕事の積み重ねを大切にして肩関節医学の進歩と普及に微力ながら貢献できればと考えておりますので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



代議員 笹沼 秀幸

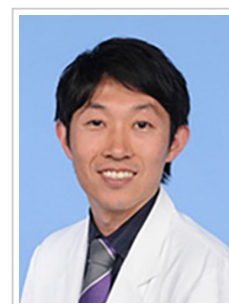
この度、代議員に選出されました自治医科大学 整形外科講座の笹沼秀幸です。私は同大を1999年に卒業し、地元の栃木県で僻地および地域医療に携わってまいりました。整形外科を専門としたのち、関節外科の中で特に運動機能再建をトータルサポートできる「肩関節」に魅力を感じ、専門にしました。当時、教室内に肩関節診療班がありませんでしたが、北関東をはじめ全国の諸先輩方の温かいご支援により、充実した活動を展開し、継続することができました。学会在籍10年を一つの節目と考えて、今後は「肩関節」を通して社会に貢献できるように取り組んでまいります。研究・教育・臨床を実践し、微力ながら本学会の発展のためのお手伝いできれば幸甚の至りです。不確定な世界の中で、日本人がこれからどんな役割を担い、どこに向かっていくのかを皆様と一緒に考えていきたいです。今後とも御指導・御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



代議員 芝山 雄二

この度、代議員に選出して頂きました芝山雄二と申します。私は2006年に札幌医科大学を卒業、同整形外科に入局し、肩関節鏡の手術ができるようになりたいと思い、2012年に肩関節学会に入会致しました。

2018年から4年間は札幌医科大学で肩班のチーフとして、多くの外来・手術症例を経験すると共に、画像診断の研究に力を注ぎ、放射状MRIや再構成CTデータからの仮想X線画像を用いた研究を英文にすることができました。この業績で、日本肩関節学会の国際論文奨励賞を頂き、研究結果を形にできる喜びを経験することができました。このような賞を創設頂いた委員会の皆様には大変感謝しており、また自分もこのように肩関節医学の発展に貢献する仕事をしたいと思っております。



最後に代議員選挙にあたり推薦人となって頂きました昭和大学藤が丘病院の西中直也先生、慶應義塾大学の松村昇先生、ご支援を頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。

代議員 杉森 一仁

この度、日本肩関節学会代議員に選出していただきました富山赤十字病院の杉森一仁と申します。私は1997年に富山医科薬科大学（現富山大学）を卒業後、同整形外科に入局し、関連病院での研修後に2000年に同大学院に入学し、関節軟骨の再生、分化について研究しました。2007年に日本肩関節学会に入会し、2008年に船橋整形外科病院に国内留学し、菅谷啓之先生に御指導をいただき、肩関節疾患診察の仕方、保存加療の重要性、関節鏡手術手技について大変多くのことを学びました。富山大学に戻ってからは特に腱板断裂の治療を多く行い、肩甲下筋腱断裂の画像評価など臨床に即した研究を行っております。2016年からは現在の病院に異動し、日本リウマチ学会専門医、指導医資格を取得し、リウマチセンター長として多くの関節リウマチ患者の肩関節治療にも従事しています。今後はさらに本学会の発展に貢献できるように尽力する所存でございますのでどうぞよろしくお願いいたします。



代議員 藤澤 基之

この度、日本肩関節学会の代議員に就任させて頂く事になりました、久恒病院の藤澤基之と申します。私は1996年に福岡大学に入局した後、磐城共立病院で、田畑先生、相澤先生、田中先生の下で学ばせて頂き、米国留学では、Columbia大学においてProf. Bigliani, Dr. Leveneの下で手術を学び、また同時期に留学されていた橋口先生にも多くの事を教えて頂きました。さらに船橋整形外科で肩fellowの経験をさせて頂きました。2013年より当院で、名誉会員である原正文院長の下、投球障害・運動療法の研究や、腱板・不安定症・肩鎖関節脱臼の肩関節鏡手術などの経験を積み、理学療法士とともに肩関節学会などで発表・報告を重ねてまいりました。本学会には、1997年に参加させて頂いて以来、多くの事を学ばせて頂きました。今後は、代議員として本学会に貢献できればと考えております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。



代議員 光井 康博

この度、日本肩関節学会の代議員に選出していただきました百武整形外科スポーツクリニックの光井康博と申します。私は2001年に久留米大学医学部を卒業後、同整形外科教室に入局いたしました。後藤昌史先生の御指導の下、肩関節外科医として研鑽を積んで参りました。2007年には「腱板断裂由来肩峰下滑液包線維芽細胞に対するヒアルロン酸の影響」という論文で名誉ある高岸直人賞（基礎）を受賞いたしました。2018年より現職の百武整形外科スポーツクリニックに勤務し、一般診療や手術に加え、プロ野球球団のチームドクターとしての活動も行っております。今後も伝統ある日本肩関節学会の更なる発展に少しでも貢献できるよう、臨床・研究の両面で精進していきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。最後に、推薦人となっていただきました黒川大介先生、後藤昌史先生を始め、ご支援いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。



代議員 森川 大智

このたび、日本肩関節学会代議員に選出して頂きました順天堂大学の森川大智と申します。私は2006年に順天堂大学を卒業し、2008年に同整形外科に入局いたしました。2013年に学位取得し関連病院にて勤務した後、現在は大学にて准教授を拝命しております。

日本肩関節学会には2012年に入会し、翌年に基礎研究にて高岸直人賞を頂きました。2016年には国際委員会のご推薦にて、米国コネチカット大学に研究留学いたしました。そのご縁もあり、ASESのcorresponding memberに就任し、本年からはISAKOS Shoulder Committeeに選出され活動を行っております。多くの諸先輩方のご高配をいただき、貴重な経験を積ませて頂いております。今後は、肩関節の臨床及び研究に邁進すると共に、日本肩関節学会に恩返しできるような微力ながら精一杯頑張らせて頂く所存でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

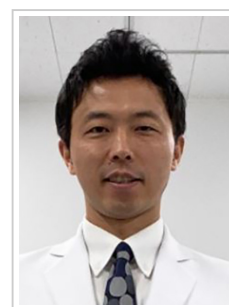


代議員 門間 太輔

この度、日本肩関節学会代議員に選出いただきました北海道大学病院スポーツ医学診療センターの門間太輔です。

私は2007年に北海道大学医学部を卒業後、同大学整形外科に入局しました。学生時代に野球をしており、入局後に肩関節の診療に魅力を感じて肩関節外科医を志しました。北海道大学整形外科で研鑽し、投球障害に関する研究成果を日本肩関節学会で発表すると共に英文論文として発表して参りました。近年では、4次元CTを用いた肩関節接触面に関する研究を行っております。

日本肩関節学会には2009年に入会以降、学会発表などの活動を通して肩関節外科医として育てていただいたと感謝しております。今後はこれまで以上に臨床および研究活動に励み国際学会や英文論文として積極的に発表していくと共に、日本肩関節学会の将来を担う人材を育成するために後進の指導にも力を入れていきたいと考えております。今後とも宜しくよろしくお願い申し上げます。



第50回日本肩関節学会学術集会を終えて

第50回日本肩関節学会学術集会 会長 東邦大学 医学部整形外科学講座 池上 博泰

第50回日本肩関節学会学術集会を会長池上博泰、第20回日本肩の運動機能研究会を会長松村昇先生のもと2023年10月13日（金）・14日（土）の2日間、新宿の京王プラザホテルにおいて開催させていただきました。第50回学術集会を主催できたことはこのうえない光栄であり、その重責と使命を果たした今、少し安堵しております。本学会はweb開催も含めて1700名を超える参加者となり、大きな混乱もなく無事に本会を開催できたこと、ここにあらためて会員の先生方ならびに学会運営に携わっていただきました皆様方に感謝申し上げます。

学会のテーマは“Standing on the shoulders of giants（巨人の肩の上に立つ）”としました。アイザック・ニュートンが同じ科学者であるロバート・フックへ当てた手紙の中で、（If I have seen further, it is by standing on the shoulders of giants.）と書いて有名になった言葉です。この起源は12世紀のフランスの哲学者であるシャルトルのベルナルドゥスの言葉といわれています。

この50年の歴史の中で先人が作り上げてきた本会の歴史を踏まえて、未来に目を向けた斬新な発想に基づく研究成果を自由に発表して討論していただける会となるように努めてきました。肩関節の治療には、リハビリテーションスタッフ、看護師との連携も極めて重要です。併設の日本肩の運動機能研究会を含め、メディカルスタッフの方々にも積極的にご参加いただき、若手整形外科医、リハビリテーションスタッフ、看護師にとってより一層魅力ある学会にしたいと考えました。



池上博泰会長、松村昇会長



特別講演 小川清久先生



Combined Session 1 プロ野球における医師とトレーナーの役割

第50回という節目なので、“日本肩関節学会のあゆみ”と“日本肩関節学会のダイバーシティ&インクルージョン”という座談会を2つ企画し、さらに第20回日本肩の運動機能研究会として”日本肩の運動機能研究会の歩みと今後の展望”という座談会も企画して、多くの参加者から好評価をいただきました。

みなさまのおかげで、650題の一般演題登録をいただきました。第50回日本肩関節学会の応募演題482題を1演題につき代議員3名による厳正な査読審査をお願いして、426演題を採用（採用率88%）としました。第20回日本肩の運動機能研究会としては、日本肩の運動機能研究会世話人の先生方に査読していただき、計164演題（口演112、ポスター52）を採択させていただきました。

特別講演は、名誉会員で私の師匠である小川清久先生に“日本肩関節学会50年の軌跡”というテーマで、若い会員の知らない日本肩関節学会の歴史を、多くのエピソードを混ぜてご講演いただきました。日本肩関節学会と日本肩の運動機能研究会のCombined Sessionとして“プロ野球における医師とトレーナーの役割”と“凍結肩に対する理学療法とその限界”を企画し、医師だけでなく、メディカルスタッフの方々からも多くの質問やコメントをいただき、活発な討論が行われました。



座談会 日本肩関節学会のあゆみ



座談会 日本肩関節学会のダイバーシティ&インクルージョン

第1日目の開会式前に“肩関節周囲の骨折”に関するレビューセッションを同門の肩関節外科医の協力のもと行い、第2日目の閉会式前に特別シンポジウム“RSAが使えるようになって10年-このRSAを使う理由”を第一会場で行いました。どちらも予想以上に多くの参加者が大きな会場に集まっていただき、おかげさまで通常より多くの参加者が開会式、閉会式にも参加していただきました。

海外からは、米国フロリダ大学のProf. Thomas W. Wright先生、スイスベルン大学のProf. Matthias A. Zumstein先生、フランスパリInstitut de la MainのDr. Philippe Valenti先生、韓国ソウルSungkyunkwan大学のProf. Jae Chul Yoo先生 (KSESのPresident)、韓国ソウル大学のProf. Joo Han Oh先生 (KSESの前President) らが参加していただき、国際シンポジウム “～ My Worst Case ～”, ASES Session, SECEC Session, KSES Sessionでご講演をしていただきました。それぞれのSessionには、各地域のtraveling fellowも加わり、活発な討論を行なっていただきました。



事務局スタッフ一同

今回は新型コロナウイルス感染症が5類になったのを契機として、ポスター発表も再開しました。久しぶりにポスター前での熱い議論も復活しました。さらに第6, 7会場は第20回日本肩の運動機能研究会専用の会場として、シンポジウム”肩疾患リハビリテーションにおける超音波の活用”、主題、一般演題の発表が行われました。また日本肩の運動機能研究会としては初めての教育研修講演も開催され、多くの若手セラピストが参加してくれました。

以上のような多くの企画を行い成功裡に終えることができたのも、それぞれの企画にご協力いただいた関係者の方々のおかげと心から感謝と御礼をあらためて申し上げます。

末筆になりましたが、第50回日本肩関節学会学術集会を主催させていただけたこと、皆さま方に感謝申し上げます。ありがとうございました。



第20回日本肩の運動機能研究会の座談会後の集合写真

第51回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ

滋賀医科大学整形外科 今井 晋二

この度 第51回日本肩関節学会学術集会を主催させていただきます滋賀医科大学整形外科の今井でございます。伝統ある本学会学術集会を滋賀医科大学の主催で行わせていただくことは、この上ない光栄に存じます。日程は令和6年10月25日と26日、場所は京都国際会議場で予定しております。この季節は秋も深まりゆく時期でとても過ごしやすく、京都は新幹線からも、3つの関西の空港からもアクセスがよく、皆様にお越しいただけることを大変楽しみにしております。

テーマは「Cutting Edge Science for Shoulder」で直訳しますと「肩の最新科学」です。肩関節外科は2000年になって2つのとても大きな変化を経ました。

1つは2000年頃を中心に導入された関節鏡視下手術です。それまで直視下で行われていた 腱板修復術や



Bankart修復術など、ほとんどの手技が関節鏡視下手術にとって変わりました。もう1つは 2014年から導入されたリバーズ人工肩関節置換術です。リバーズ人工肩関節の導入を契機に肩関節外科にとって人工関節置換術自体が大きなウエイトを占めるようになりました。

この2つの大きな波によって肩関節外科医は2つの大きなテクニックを身につけなければならないようになりました。しかし、これがやはり刺激になり学会の活性化、治療の高度化が起きました。本学術集会では関節鏡視下手術の未解決の部分、一次修復不能腱板断裂や再断裂例を、また肩関節脱臼では高度関節窩骨欠損などこれからの関節鏡視下手術が直面するテーマを主題として考えています。

リバーズ人工肩関節置換術もより大きな可動域改善や筋力の向上、そしてより多くの方にスポーツ復帰など高いレベルの機能改善をもたらす技術が求められることでしょう。本学術集会ではこのようなリバーズ人工肩関節置換術に関する新たな取り組みを主題として取り扱うつもりです。

肩の運動機能研究会の方では、関節鏡視下手術やリバーズ人工肩関節置換術に関するリハビリテーションはもちろん、保存療法に関するプロトコールなども取り上げたいと考えています。10月後半の京都は秋が深まりゆく時期で、街角もとても美しい時期です。京都での「Cutting Edge Science for Shoulder」は明日からの貴方・貴女とあなたの臨床を変えることでしょう。

第52回・53回日本肩関節学会学術集会のお知らせ

第52回日本肩関節学会

学術集会会長：伊崎輝昌（福岡大学筑紫病院 整形外科）

併催：第22回日本肩の運動機能研究会

研究会会長：三宅智（福岡大学医学部整形外科教室）

【開催日】2025年10月10日（金）～11日（土）予定

【開催場所】福岡（福岡国際会議場）予定

第53回日本肩関節学会

学術集会会長：北村歳男（熊本整形外科病院）

併催：第23回日本肩の運動機能研究会

研究会会長：菊川憲志（熊本総合病院 整形外科）

【開催日】2026年10月30日（金）～31日（土）予定

【開催場所】熊本（熊本城ホール）予定

肩関節外科医を志す人達へー肩の魅力を語る

松戸整形外科病院 黒田 重史

私は1970年に千葉大学を卒業し、将来の専門分野として肩関節外科に興味を抱いておりました。しかし当時、千葉に肩の指導者は居なかったため、1981年に信原克哉先生にお願いして国内留学させていただきました。信原病院での研修はわずか3カ月間でしたが、動揺性肩関節の実際を見て、私のライフワークである非外傷性肩関節不安定症に出会う事ができました。それまでは関節造影で腱板完全断裂を見つけ、細々とMcLaughlin法をしていただけでしたが、急に視野が開け、本格的に肩にのめり込むことになりました。

肩関節研究会での洗礼

1983年に長崎で開催された第10回日本肩関節研究会で初めて2演題を発表しました。1題はGlenoid osteotomyの効果をCTで定量的に解析した内容でした。この演題に対して長崎の伊藤信之先生にGlenoid osteotomyとScottの手術の違いについて詰問され、答えても答えても「納得できません」とマイクの前に戻ってくる伊藤先生を見ながら、足が震え壇上で立ち尽くしていました。師匠の信原克哉先生が座長でしたが、「もっとやれ」と言いたげに、にこにこされていました。厳しい追及から逃れて、ほうほうの体でフロアに戻ると、山本龍二教授、安達長夫先生、田端四郎先生、三笠元彦先生が手招きして呼んで下さり、慰め励ましていただきました。厳しかった伊藤信之先生も会場を出る時に「さっきはごめん」と肩をたたきながら親しく声をかけて下さり、肩研の厳しさと暖かさを同時に味わいました。

若い先生へのメッセージ

1. 患者データベースの勧め

私は1985年に松戸整形外科病院を開院致しました。開院当初より肩患者のデータ116項目をデータベースに取り込みました。当時は日本語が扱えるPCはNECしかなく、日本語データベースは「桐」しか選択枝がありませんでした。メディアも5インチフロッピーディスクと言うペラペラな磁気ディスクで、容量わずか320kBの中にソフトとデータを格納しました。これをドライブに挿入するとカタカタとのんきな音を立てて動き出します。暫くして20MBのHDDが発売された時には、こんな大容量なら一生使えると思いました。今振り返ると長閑な時代でした。紙カルテの時代は毎日、初診、再診の肩データを全て手入力更新しました。この作業には毎日1時間半から2時間ほどかかりました。2000年に導入した電子カルテはAccessベースでしたので、クエリーとビジュアルベーシックで簡単に改造できましたので、自分で肩所見入力フォームを作成して、自動で肩データベースに取り込みました。こうして蓄積した肩データは1985年からセミリタイアした2014年までの29年間で40,762例、47,371肩になりました。日々のデータ整理は大変ですが、毎日肩のデータに接していると研究課題が自ずと浮かび上がり、必要なデータは1時間以内に集めることが出来ました。

2. 全ての患者の触診

新患だけでなく再診患者も全て触診します。当たり前のことですが実行はなかなか難しいです。信原病院で動揺性肩関節を見せていただいてから、診断はできるようになりましたが、治療法が判らず、むなしく経過を見ておりました。そんな中で、来院する度に肩不安定性を触診、記録していると、不安定性が変化することを知りました。4年間の経過観察で確認した9.2%の自然治癒は安易な手術適応を戒めています。

3. 非外傷性肩関節不安定症の診療ポイント

保存療法の基本は姿勢矯正

若い女性が肩こりを訴えて来院したら、先ず動揺性肩関節を疑います。上肢下方牽引で骨頭が下方移動するのは検者だけでなく本人も認識できます。次に姿勢を正すと、上肢下方牽引で骨頭が下方移動しなくなった事もまた認識出来ます。これが姿勢矯正の重要性を理解させる重要なポイントです。

機能的関節窩

非外傷性肩関節不安定症の理学療法としては筒井廣明教授が提唱したCuff-Y exerciseが大変有用ですが、肩関節挙上位X線を見ると、非外傷性肩関節不安定症では肩甲骨の上方回旋が不足しているのが判ります。骨頭を中心に肩甲骨がその周りを回転すると考えると、下垂位から最大挙上位に至る肩甲骨関節窩の軌跡が機能的関節窩です(図1)。横断面での関節窩の軌跡(図2)も加わりますので、肩甲骨上腕リズムが正常に保たれている限り、肩関節は一般に考えられているほど不安定ではありません。静的には猪口にテニスボールを乗せた状態と例えられますが、機能的関節窩を加味すると、小鉢にテニスボールを入れた状態と例えると判りやすいです。従って肩甲骨主動作筋の再教育、強化も重要です。

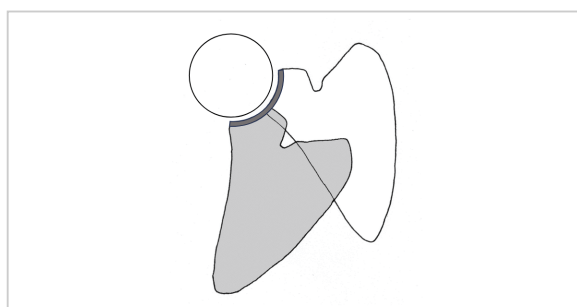


図1: 冠状面機能的関節窩
下垂位から挙上位までの冠状面での肩甲骨関節窩の軌跡(濃いグレー)が冠状面の機能的関節窩。

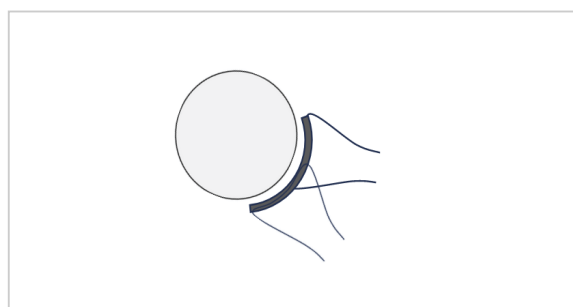


図2: 横断面機能的関節窩
肩甲骨全可動域における横断面での肩甲骨関節窩の軌跡(濃いグレー)が横断面の機能的関節窩。

手術術式

鏡視下関節包熱収縮は無効ですので安易に施行してはいけません。非外傷性肩関節不安定症の主要な不安定方向は下方+前方または後方の二方向ですので、関節窩傾斜角の補正だけではなく、前方または後方の関節窩延長を同時に行う二方向臼蓋形成術を施行しております。完璧な制動効果とは言えませんが、強敵に立ち向かうには今のところ、二方向臼蓋形成術か遠藤寿男

先生の大胸筋移行術しかないと思います。特に習慣性後方脱臼に随意性前方脱臼を合併している症例は難敵です。

4. 腱板断裂

腱板断裂の臨床診断で最も有名なのはDrop arm signです。水平外転位を保持できないと腱板断裂と即断しがちですが、この場合最大挙上位を保持できるか必ず確認します。最大挙上位保持可能なら診断は腱板断裂です。最大挙上位保持不能なら責任病巣は三角筋であり、肩外側の知覚障害を伴えば腋窩神経麻痺、伴わなければ解離性運動麻痺です。簡単で有効な鑑別診断です。

ATOS(鏡視下骨孔腱板修復術)の宣伝

2005年にアンカーを使用しない鏡視下骨孔腱板修復術を考案し、現在まで約2143例施行しました。2015年以降は2本の吸収糸マットレス縫合と、3本の非吸収糸ブリッジング縫合を組合わせており、再断裂率は小断裂0%、中断裂0.8%、大断裂7.6%、全体として1.8%と極めて良好な結果を得ております。腋窩神経損傷は1例も発生していません。ATOSは手術材料費が縫合糸のみで1000円程度と安価なのも利点であり、このため2014年のフィリピンで開催されたアジア肩学会での発表以来、インドで非常に注目されております。2016年にはインドで手術供覧と400人を超える聴衆を前に講演を行いました。その後2名の留学生を受け入れました。2021年にはベルリンでのESMED(ヨーロッパ医学会) General AssemblyのThe Future of Surgeryセッションでの講演を依頼され、その数カ月後にはインドのOrthopaedic Principlesでも講演を依頼されていずれもオンライン参加しました。

5. 第32回日本肩関節学会

2005年9月に学会運営会社を使わずに、第32回日本肩関節学会を主催しました。事務局長を務めた石毛徳之先生、私の秘書である娘や裏方を支えてくれた妻は、学会終了時には疲労困憊の状態でした。過ぎてみれば家族総出で運営できた喜びのみが蘇ってきます。本学会では、三笠元彦先生の助言で上腕骨近位端骨折を取り上げました。Codmanがその可能性を示唆した14の骨折型の中で、Neer分類にない骨折型を第32回、伊藤博元教授の第33回、玉井和哉教授の第34回と3回にわたる日本肩関節学会の継続主題とし、その結果は玉井教授執筆によりJSESに掲載されました。

6. 肩関節研究の花道

2021年名古屋で開催された岩堀裕介会長の第48回日本肩関節学会で、特別講演「非外傷性肩関節不安定症の診断と治療」の講師に指名していただきました。学会活動の最後の花道として、日本肩関節学会で私のライフワークを披露できたのは願っても無い事でした。

肩関節外科を目指す若い先生方、多くのデータに裏打ちされた独創的な研究を期待してやみません。

文献

1. Kuroda S, Sumiyoshi T, Moriishi J, Maruta K, Ishige N.
The natural course of atraumatic shoulder instability. J Shoulder Elbow Surg. 10;2, 2001, 100-104.
2. Tamai K, Ishige N, Kuroda S, Ohno W, Itoh H, Hashiguchi H, Iizawa N, Mikasa M.
Four-segment classification of proximal humeral fractures revisited: A multicenter study on 509 cases. J Shoulder Elbow Surg. 2009, 18;6, 845-850.
3. Kuroda S, Ishige N, Mikasa M.
Advantages of arthroscopic transosseous suture repair of the rotator cuff without the use of anchors. Clin Orthop Relat Res. 2013; 471 (11) : 3514-3522.
4. Kuroda S, Ishige N, Mikasa M.
Reply to the Letter to the Editor. Advantages of arthroscopic transosseous suture repair of the rotator cuff without the use of anchors. Clin Orthop Relat Res. 2014; 472 (3) : 1044-1045.
5. Kuroda S, Ishige N, Ogino S, Ishii T.
Arthroscopic transosseous suture without implant for rotator cuff tears: Absorbable mattress sutures versus nonabsorbable sutures. Int. J. of Orth. 2019; 28; 6 (1) : 1003-1011.
6. Kuroda S, Ishige N, Ogino S, Ishii T.
Clinical and economic advantages of anchorless arthroscopic transosseous suture repair of the rotator cuff. Medical Research Archives. 2021; 9 (5) : 1-16.

//////////////////// 受賞報告 //////////////////////

本学会の名誉会員の高岸憲二先生が2023年9月5～8日にローマで開催された15th ICSES (International Congress on Shoulder and Elbow Surgery) でIBSES (International Board of Shoulder and Elbow Surgery) のPioneer in Shoulder and Elbow Surgeryとして表彰されました。表彰式の風景は15th ICSESのホームページ (<https://www.icses2023.com>) 上でも紹介されています。

高岸憲二先生から受賞のごあいさつをいただきましたのでご紹介させていただきます。

“Pioneer of Shoulder and Elbow Surgery”として表彰されました

佐田病院名誉院長 群馬大学名誉教授 **高岸 憲二**

今年ローマで行われた15th International Congress of Shoulder and Elbow Surgery (ICSES2023) の開会式で、私は『Pioneer of Shoulder and Elbow Surgery』の一人として表彰されました。

学会が始まる前の2023年5月にIBSES理事長のDr. Osvandre Lechから以下のようなメールが届きました。
“On behalf of the IBSES (International Board of Shoulder and Elbow Surgery) , I am thrilled to invite you to receive the honorary title of “PIONEER” during the 15th ICSES to be held in Rome next September 5-8, 2023 . You are a great supporter of the ICSES and the IBSES during all these years and we want to recognize this! -----Please let me know if you are considering participate of the 15th ICSES.

ちょっと驚きましたが、今回のICSES2023には当初より参加予定でしたので『参加します。』と返信しました。
私の肩関節外科医への道は、九州大学整形外科学教室および関連病院での研修期間を終えた後に米国

コロンビア大学でNeer教授の下で1年間visiting shoulder fellowを務めたことから始まりました。Neer教授から人工肩関節置換術など肩関節外科全般について教わるとともに多くの海外の肩関節外科医と知り合うことができました。帰国後に九大整形外科助手から北里大学整形外科助教授へ移動し、後に縁あって群馬大学整形外科へ教授として赴任しました。

コロナ感染症のために1年延期して開催されたICSESのopening ceremonyでは海外の多くの友人らと旧交を温めることができたことは大変嬉しい事でした。しかし、参加登録では3番目に多いはずの日本の整形外科医とは誰にも会えなかったことはちょっと残念でした。opening ceremonyではWalch, Castagna, Iannottiら9人と一緒に表彰されました。

世界で最も古い歴史を持つ日本肩関節学会には私より先に表彰されてもおかしくない諸先輩や同輩が多くおられます。現在の私があるのは先達の指導や同輩や後輩と一緒に仕事できたからです。第3回国際肩関節学会高岸直人会長、山本龍二副会長、福田宏明事務局長をはじめ、信原克哉先生ら多くの日本肩関節学会会長がおられ、IBSSやIBSESではnational delegateとして小川清久先生や玉井和哉先生らが活躍されてきました。

今まで私が肩肘関節領域で貢献できたことは、『多少の英文論文執筆』、『日本で治験することなく厚労省から最初に使用許可された手術機器であるリバース型人工肩関節の導入』、『小中学生の肩肘障害に関する全国規模の実態調査』などですが、これも日本肩関節学会および日本肘関節学会の多くの会員の皆様と一緒に仕事をしていただいたおかげです。Journal of Shoulder and Elbow SurgeryのEditor in Asiaは水野耕作先生から引き継がせていただいた後、associate editorを務めました。2013年に名古屋で行われたICSESも私と一緒に共同会長を務めた井樋栄二先生、筒井廣明事務局長をはじめ日本肩関節学会の先生方、日本肘関節学会の先生方が力を合わせて大成功の裡に終えることができました。

今回の表彰は世界の肩関節外科学の発展に寄与されてきた50年の歴史を持つ日本肩関節学会会員の皆様に代表して私がいただいたと考えています。

私が最初に参加した福岡で行われた第3回国際肩関節学会 (ICSS) 当時は、肩関節外科に対する論文や教科書もほとんどなく、手探りで手術を行っている時代でしたが、多くのリバース型人工肩関節置換術や鏡視下肩関節手術が行われている現在の肩関節外科の隆盛をみると隔世の感があります。今回のICSES2023において日本からの参加登録者数および発表数は世界のトップ5だったと記憶しています。

私は今後も日本の肩関節外科の進歩に少しでもお役に立てればと考えています。

日本肩関節学会の会員の皆様ますます世界の肩肘関節外科学の進歩に貢献されることを祈念しています。



学術論文紹介

第36回高岸直人賞は基礎論文で上原弘久先生、臨床論文で有野敦司先生が受賞されました（有野敦司先生の論文紹介は次号以降に掲載予定です）。

第36回(第49回日本肩関節学会)高岸直人賞受賞 基礎論文

順天堂大学附属浦安病院 上原 弘久

The Effect of Vitamin C and N-Acetylcysteine on Tendon-to-Bone Healing in a Rodent Model of Rotator Cuff Repair

Uehara H, Itoigawa Y, Wada T, Morikawa D, Koga A, Nojiri H, Kawasaki T, Maruyama Y, Ishijima M.

The American Journal of Sports Medicine. 2023 May;51 (6) :1596-1607.

この度は栄えある高岸直人賞基礎論文部門を受賞し誠に光栄に存じます。本賞選考委員の先生方ならびに選考にご尽力を頂きました理事・代議員の先生方に心より御礼申し上げます。

腱板修復術において修復部における腱骨間の癒合は重要である。酸化ストレスは修復部の癒合を阻害すると報告されているが、その対処法は確立されていない。本研究の目的は、ラット腱板修復モデルを用い抗酸化剤であるN-アセチルシステイン (NAC) やVitamin C (VC) による酸化ストレスの軽減が腱板修復部に与える影響を調べることである。

SDラットを用い、棘下筋腱を断裂させ1週後に修復する腱板修復モデルを作製した。3群に分け、NAC (NAC群), VC (VC群), 又は蒸留水 (Control群) を飲水させた。修復後3,6,12週後に腱板上腕骨頭を採取し、組織学的評価とDihydroethidium (DHE) 輝度とカルボニル化蛋白より酸化ストレスの評価を行った。また抗酸化酵素Superoxide Dismutase (SOD) 1,2,3,peroxiredoxin (PRDX) 5, また腱骨癒合の関連酵素としてCOL1,3, MMP1,3,13のmRNA発現を測定した。さらに引張試験機にて腱骨付着部の引張強度を測定した。統計は2元配置分散分析を用い3群間で比較を行った。

組織学的評価では、Control群と比較しchondrocytesは修復6週後のNAC群 ($p < 0.05$), VC群 ($p < 0.01$) で、fibrocartilageは6週後のVC群 ($p < 0.05$) で、collagen fiberは6週後のNAC, VC群で増加し ($p < 0.05$)、NAC, VC群で癒合促進傾向を認めた。DHE輝度は3,6週後のNAC群 ($p < 0.05$), VC群 ($p < 0.01$) で低下しカルボニル化蛋白は6週後のNAC, VC群で減少した ($p < 0.05$)。mRNA発現に関しては、3週後のVC群でSOD1, 6週後のNAC群でPRDX5が上昇した ($p < 0.05$)。COL3は6週後のVC群で上昇し ($p < 0.05$)、MMP13は6週後のNAC, VC群で低下した ($p < 0.05$)。引張強度に関して3群間に有意差は認めなかった。

NAC, VC共に腱板修復部における酸化ストレスを軽減し腱骨間の癒合を促進した。さらにVCは酸化ストレスの強い低減とCOL3の上昇により、より強い癒合傾向を認めたと考えられた。

最後になりましたが、本研究の御指導頂いた糸魚川善昭先生、ならびに御助言を賜りました森川大智先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。

トラベリングフェロー帰朝報告

KSES-JSS トラベリングフェロー帰朝報告

広島大学病院 整形外科 原田 洋平

2023年3月6日からの4週間、長谷川彰彦先生とともに韓国の各施設を訪問しました。濃密な4週間で、全てをお伝えできませんが、少しでも学会員の皆様と共有したいと思います。私は前半の2週間について報告いたします。

3月6日、関空から釜山に到着し、その後ウルサンに移動し、夜はKOAウルサン支部の会に参加しました。翌日、Sang Hun Ko教授の手術を見学しました。肩甲上神経、腋窩神経、外側胸筋神経をそれぞれブロックし、ARCR 5件をすべて異なる修復方法で行っていたことが印象的でした。3月8日はテグに移動し、Chang-Hyuk Choi教授の手術を見学しました。ARCRは斜角筋間ブロックによる覚醒下手術で行われ、2件あったRSAはどちらも日本に導入されていない機種でした。3月9日にはチョナンに移動し、Jun Bum Kim教授を訪問しました。昼過ぎまでの限られた時間でしたが、手術室1つでARCR 2件と脱臼1件を非常に綺麗に行っており、手術の合間には症例の検討なども行いました。その後、午後からテジョンへ移動し、周辺のKSESメンバーとの夕食会、翌日はJung-Hun Ji教授の手術見学を行いました。夕方からはテジョン地域の月例会で、Kwan Jin Rhee教授も参加される中、我々も発表の場をいただきました。

週末の3月11日はコンジュを観光し、韓国の歴史ある美しい史跡を巡りました。翌日はクアンジュに移動し、訪問先のMyung Sun Kim教授より熱烈的な歓迎をいただきました。3月13日はKim教授の手術見学と研究室見学を行い、3月14日はYoung Lae Moon教授を訪問しました。Moon教授は1日6件の手術と外来を同時に行っており、そのスピードとエネルギーには圧倒されました。3月15日にはソウル近郊のトンタンのYon-Sik Yoo教授を訪問し、LHBとdermal allograftを用いたARCRや、iliac allograftを用いた鏡視下制動術などオリジナリティ溢れる手術を見学しました。3月16日にはSang-Jin Shin教授のもとで7件の手術を見学し、手術の合間にはmini lectureもあり、濃厚な1日でした。3月17日にはJae Chul Yoo教授を訪問し5件の手術見学をしましたが、特に肩甲下筋腱修復に対する考え方は非常に勉強になりました。週末はプサンに移動し、KSESメンバーとの夜の会とプサン観光を楽しみました。

簡単に2週間を振り返りましたが、韓国では日本で想像できない程スピーディな手術と運営が行われており、様々な手技の工夫や新しい製品を駆使し、論文化にむけた臨床研究が行われており、沢山の刺激を受けました。また韓国の先生方のホスピタリティは想像をはるかに超え、楽しい時間を過ごさせていただきました。韓国と日本の友好関係が今後も継続する事を願い、また私もその一助になれるよう交友関係を維持、発展させていきたいと思っています。このような機会を与えていただいた日本肩関節学会の皆様、迎え入れてくれたKSESの皆様に深謝申し上げます。また4週間をともに過ごした長谷川彰彦先生、不在中ご迷惑をかけた医局の先生方に心より感謝申し上げます。



前半2週間のHostの先生方と



テジョン地域の月例会 (Daejeon Chungcheong Shoulder elbow society Monthly meeting)



プサンでの夜の会

KSES-JSS トラベリングフェロー帰朝報告

大阪医科薬科大学整形外科 長谷川 彰彦

2023年3月6日から4月2日の4週間、KSES-JSS Travelling Fellowshipにて広島大学の原田洋平先生とともに韓国の19の施設訪問とKSES annual meetingに参加する機会をいただきました。前半を原田洋平先生にご報告いただきましたので、私は後半の3,4周目の訪問先についてご報告いたします。

多くのトップアスリートの治療を手掛けておられるJin Young Park先生 (Neon Orthopaedic Clinic) は外来4部屋を巡回するようにして効率的に進めており、約5時間の外来で64人もの患者さんを診察されていました。診察は丁寧で、エコー（エラストグラフィーも）を使ってリアルタイムに患者さんに説明する姿が印象的でした。

2022年のKSESのpresident であるYang Soo Kim先生 (Seoul St. Mary's Hospital) には腱板大・広範囲断裂に対するbiceps reroutingと、アキレス腱のallograftを用いたLower Trapezius transferといったユニークな手術を見せていただきました。

KSESのsecretary general、Sae Hoon Kim先生 (SNHU: Seoul National University Hospital) には筋前進術を併用した鏡視下腱板修復術など4件の手術を見せていただきました。加えて手術後にはSNHUのキャンパスツアーに連れて行っていただきました。

Young Kyu Kim先生 (Gacheon University Gil Medical Center) にはプレゼンの機会をいただいたあと、4件の手術を見せていただきました。Kim先生には2019年のGachon shoulder symposiumにお招きいただいて以来でしたが、私のことを覚えていてくださって感激しました。

Joo Han Oh先生 (Seoul National University Bundang Hospital) は朝、自らホテルに迎えにきてくださいました。Mini symposiumで発表の機会をいただきましたが、自チームの発表内容に対しては鋭い（厳しい？）ご指摘をしておられて、締めりのある雰囲気でした。手術中にはコンセプトやテクニックについて多くの説明をしていただきましたが、こちらからの質問に対しては必ずご自身の論文をベースに、エビデンスに基づいた回答をしてくださったこと、その際にも手術のスピードが落ちないのがとても印象的でした。

週末は土曜日にJae Hoo Lee先生とHo Won Lee先生がソウル観光に連れて行ってくれました。トルコ、タイからのトラベリングフェローとともに韓国王朝の服をレンタルして景福宮（キョンボックン）を観光しました（写真1）。

日曜日はHyeon Jang Jeong先生に案内していただき、トルコからのトラベリングフェローとともに朝8:30にホテルを出発してDMZ (demilitarized zone: 韓国と北朝鮮との実効支配地域を分割する非武装地帯) ツアーに連れて行ってもらいました。北朝鮮と陸続きに隣りあわせにあるという国際事情を垣間見ることができました。

Woong Kyo Jeong先生 (Korea University Anam Hospital) には整形外科全体のカンファレンスに参加させていただいたあと3件の手術を見学させていただきました。トラベリングフェローとして日本を訪問したいと言っておられて嬉しく思いました。

Kyu Cheol Noh先生 (Hallym University Kangnam Sacred Heart Hospital) には NavigationとPSIの両方を使用したRSAなど4件の手術を見せていただきました。夕食時は若いYong Tae Kim先生、Jung Youn Kim先生らの参加によりこれまでで最大の飲酒量になり、記憶は途切れましたが大変印象に残るディナーとなりました。

Chris Hyunchul Jo先生 (SMG-SNU Boramae Medical Center) を訪問した際は前日の深酒の影響を受けて二日酔いのままの訪問となったため、「What happened? You look completely different!」と驚きの表情で迎えられてスタートしましたが、朝からプレゼンテーションの機会をいただいた後、その後に筋前進術を



写真1: 景福宮（キョンボックン）にて。トルコ、タイからのトラベリングフェロー達と

併用した腱板修復術など5件の手術を見せていただく中で二日酔いから回復し、この日もきっちり二次会まで連れて行っていただきました。

韓国肩肘学会のBig boss、Yong Girl Rhee先生 (Myongji Hospital) には8件の手術を見せていただきました。どの手術も「Very easy!」と言いながらよどみなく進めていかれるのが印象的でした (写真2)。

トラベリングフェローの最後には30th Annual International Congress of the Korean Shoulder and Elbow Society (KSES) に参加しました。学会ではこれまでの訪問先でお会いした先生方に数多く声をかけていただきました。Traveling fellow sessionでの発表を無事に終え、会長のSang-Jin Shin先生から立派なcertificateをいただいた時にはフェローシップを何とか完走できた安堵感がありました (写真3)。



写真2: Yong Girl Rhee先生 (中央) を囲んで



写真3: 30th Annual International Congress of the Korean Shoulder and Elbow Society (KSES) において、Sang-Jin Shin会長 (中央) からCertificateをいただきました

KSES / JSS Travelling Fellowとして4週間、71件の手術見学と10回のプレゼン機会をいただき、韓国における肩関節外科の治療について多くのことを学ぶことができました。韓国の先生方は論文を書くことに関して強い情熱があり、日本よりも数多くの手術をこなしながら着実にデータを蓄積して論文化しておられるように感じました。

また、KSES annual meetingは全ての発表が英語でなされており、学会全体として国際化へ向けて取り組む姿勢を強く感じました。

訪問先ではHost surgeon として私たちを迎えてくださった先生方、フェロー、レジデントも含めてKSES memberの皆様には大変手厚いおもてなしをいただきました (写真4)。送り迎えはホテルロビーまで、駅での見送りはホームで電車が発車するまで、さらに週末は観光案内と徹底したhospitalityで歓待していただきました。また、食事についても前日何を食べたか、今日は何を食べたいか、など事前に尋ねていただいたり、酔い潰れるほどは飲ませないよう配慮していただいたり、私たちの体調に対してもお気遣いいただきました。これらは全てこれまでに友好関係を築いて来られた肩学会の先輩たちのおかげと感謝しております。



写真4: 食事会での1枚。左から筆者、Joo Han Oh先生、Jieun Kwon先生、Chris Hyunchul Jo先生、Yon-Sik Yoo先生、Hyeon Jang Jeong先生

最後に、今回のtraveling fellowshipに際しましてご尽力いただきました理事長の菅谷啓之先生、国際委員

長の三幡輝久先生、面接で選んでいただきました国際委員の先生方、事務局の川村さん、ご同行いただき、私のがままにつきあっていただいた原田洋平先生、長期出張を許可いただきました大学及び関連病院の先生方に深謝いたします。とても楽しい4週間でした。若い先生方には是非とも次回のトラベリングフェローに応募していただきたいと思います。

各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

担当理事 北村 歳男 委員長 佐野 博高

雑誌「肩関節」編集委員会では、長年副委員長として本誌の編集業務を支えて下さった鈴木一秀委員が退任され、本年度からは新たに二村昭元委員に副委員長にご就任いただき、北村歳男担当理事、筆者（委員長）、新井隆三副委員長と併せて4名の執行部体制で、委員の先生方とともに本誌の編集作業に取り組んでまいります。

お蔭様をもちまして、先日予定通り第47巻1号から3号をweb公開することができました。この場を借りて、論文をご投稿下さった会員の先生方、査読にご協力いただいた代議員、査読委員の先生方に、改めて厚く御礼申し上げます。また、去る11月28日には第48巻への論文投稿を締め切り、昨年とほぼ同数の138論文（原著・総説：1、学術集会発表論文：101、症例報告：8、Proceeding：28）のご投稿をいただきました。今後、査読・編集作業を進めていきますので、引き続きご協力よろしくお願い申し上げます。

さて、先日の編集会議において、「最近症例数や方法の不備を、単に『研究の限界』として列記しただけで、何ら考察がなされていない論文が散見される」、との指摘がありました。自らの研究の問題点や限界についてどのように考えるか、今後それらを改善・解決するために何が必要かについて考察することは、科学論文として必須です。査読の際に担当編集委員からも指摘するようになっていきますが、論文を投稿された先生方におかれましては、単に研究の限界として問題点を列記するだけでなく、是非そうした考察を記載して下さるようお願いいたします。

当委員会では、投稿者の利便性を向上させるために、投稿規定やチェック表を随時改訂しています。本誌に論文を投稿される際は、日本肩関節学会のホームページで、必ず最新の情報をご確認下さい。

日本肩関節学会ホームページ：<http://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html>

国際委員会

担当理事 森原 徹 委員長 三幡 輝久

2023年10月5日から10月20日までSECECトラベリングフェロー2名（Dr. Koray Şahin, Turkey, Dr. Ante Prkić, Netherlands）が訪日されました。トラベリングフェローのお世話をしてくださった肩学会の先生には深く感謝を申し上げます。

訪問施設：

(1) 東北大学、(2) 大阪医科薬科大学、(3) 丸太町病院、(4) 札幌医科大学、(5) 北海道大学、(6) 麻生整形外科病院、(7) 東京スポーツ&整形外科クリニック、(8) 昭和大学藤が丘病院

10月12日の国際委員会において2024年度SECEC Traveling Fellow の選考を行いました。6人の先生が立

候補されておりましたが、厳正なる審査の結果福井総合病院の山門浩太郎先生が選考されました。山門浩太郎先生には韓国からのTraveling Fellowと共にヨーロッパの著名な先生の施設を訪問していただきます。またASES Traveling Fellowを3月11日の国際委員会において選考予定です。

国際委員が増員となり、山本宣幸先生、大前博路先生、森川大智先生に新たに委員に就任していただきました。新しくなった国際委員会を本年も宜しくお願い申し上げます。

高岸直人賞決定委員会

担当理事 伊崎 輝昌 委員長 船越 忠直

第36回高岸賞受賞者として以下の二つの論文が決定いたしましたのでご報告申し上げます。

下記2名は、第50回日本肩関節学会学術集会の全員懇親会で表彰されました。

基礎

順天堂大学大学院医学研究科 整形外科・運動器医学 上原弘久先生

『抗酸化剤は腱板修復部における腱骨間癒合を促進する』

臨床

東北大学大学院 医学系研究科 整形外科学分野 有野敦司先生

『腱板断裂患者における脂肪化と筋萎縮—平均6年の前向き調査—』

また、第50回日本肩関節学会の採択演題の中からベストアブストラクトとして以下の16演題が選ばれました。

これらのアブストラクトは、JSESに”AWARD-WINNING ABSTRACTS FROM THE JAPAN SHOULDER SOCIETY ANNUAL MEETING”として掲載されます。

<基礎>

- ・ 飯尾亮介先生(大阪公立大学大学院医学研究科 整形外科)
「PTHはラット腱板断裂モデルの脂肪浸潤・筋萎縮の進行を抑制する」
- ・ 加藤達雄先生(神戸大学大学院 整形外科)
「腱板断裂におけるGlutaminase 1とStump分類の関係性」
- ・ 鶴上浩規先生(順天堂大学医学部附属浦安病院 整形外科)
「特発性凍結肩における糖化・酸化ストレスの関与」
- ・ 徳永琢也先生(熊本大学病院 整形外科)
「鏡視下腱板修復術における腱板断端の組織学的変性に関連する因子」
- ・ 中村匠先生(慶應義塾大学 整形外科)
「グリチルリチン酸による腱板断裂後脂肪浸潤の抑制効果」
- ・ 二村昭元先生(東京医科歯科大学大学院 運動器機能形態学講座)
「疎性結合組織を含めた烏口上腕靭帯後方部分の解剖」

- ・ 服部史弥先生(千葉大学大学院医学研究院 整形外科学)
「新鮮凍結屍体を用いた肩鎖関節脱臼モデルにおける安定性の検討」
- ・ 古川隆浩先生(神戸大学大学院 医学研究科 整形外科学)
「三次元培養ヒト腱板由来細胞塊の有効性の検討」
(50音順)

<臨床>

- ・ 上條秀樹先生(船橋整形外科病院)
「鏡視下腱板修復術での縫合糸汚染に対する消毒薬のランダム化比較」
- ・ 幸田仁志先生(関西福祉科学大学 保健医療学部リハビリテーション学科)
「無症候性を維持する腱板断裂患者の生活習慣や運動機能の特徴」
- ・ 小田切優也先生(北アルプス医療センターあづみ病院 肩関節治療センター)
「棘上筋萎縮の改善は術後長期成績に影響を及ぼすのか?」
- ・ 高辻謙太先生(京都府立医大大学院 運動器機能再生外科学)
「Debeyre-Patte変法の術後臨床成績の検討-多施設共同研究-」
- ・ 田村諭史先生(JCHO熊本総合病院)
「肩甲下筋下部と代償性に肥大した小円筋は骨頭上方化を抑制する」
- ・ 時田諒先生(札幌医科大学附属病院リハビリテーション部)
「相同モデルを用いた肩腱板断裂の発症に関連する肩甲骨形状の解明」
- ・ 中川滋人先生(行岡病院 スポーツ整形外科)
「反復性脱臼で関節窩骨欠損は拡大するが骨片の骨吸収は起こらない」
- ・ 吉岡千佳先生(整形外科北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター)
「CTAに対する小径人工骨頭置換術と腱板再建術の長期成績」
(50音順)

第二回(2022年度) 国際論文奨励賞

第47回日本肩関節学会からの使途特定寄付金を財源とする賞の設立を理事会より高岸賞委員会に諮問され、下記の先生が国際論文奨励賞として表彰されました。

また2023年度も引き続き会員の先生方からの応募をお待ちしております。

詳細は、こちらのURLにて確認してください。

<https://business.form-mailer.jp/fms/e0148224155840>

中川 滋人 先生(行岡病院 整形外科)

- ・ New bone formation after arthroscopic Bankart repair for unstable shoulders with an erosion-type glenoid defect. J Shoulder Elbow Surg. 2023 Jan;32(1): 9-16.

- Is preoperative glenoid defect size a reliable indicator of postoperative recurrence after arthroscopic Bankart repair in teenage competitive athletes? J Shoulder Elbow Surg. 2023 Jan;32(6):1165-1173.
- Glenoid defect size increases but the bone fragment rarely resorbs in shoulders with recurrent anterior instability. JSES Int. 2022 Dec 21;7(2):218-224.
- The prevalence of shoulders with a large glenoid defect and small bone fragment increases after several instability events during conservative treatment for traumatic anterior instability. JSES Int. 2023 Apr 10;7(4):538-543.
- Glenoid rim morphology in young athletes with unstable painful shoulders: primarily painful vs frankly unstable. JSES Int. 2023 May 13;7(5):720-729.

川真田 純 先生(徳島大学 運動機能外科)

- Glenoid wear and its impact on clinical results after humeral head replacement using a single prosthesis in cuff tear arthropathy with more than 8 years of follow-up. J Shoulder Elbow Surg. 2022 Dec;31(12):2586-2594.
- Risk factors for eccentric glenoid wear after humeral head replacement for cuff tear arthropathy. JSES Int. 2022. Sep 13;6(6):889-895.
- Relationship between hematoma-like tissue on the footprint and structural outcome of arthroscopic rotator cuff repair with a transosseous technique. JSES Int. 2023 Jan 14;7(2):324-330.
- Mid-term outcomes following humeral head replacement with rotator cuff reconstruction for cuff tear arthropathy in patients younger than 65 years of age. Seminars in Arthroplasty: JSES, 2023 Aug

高山 和政 先生(倉敷中央病院 整形外科)

- Evaluation of muscle strength recovery following superior capsular reconstruction using a tensor fascia lata graft: A comparison with the unaffected side. J Shoulder Elbow Surg. 2023 Aug;32(8):1681-1688.
- Turned stem tension band technique for tuberosity repair during humeral head arthroplasty for acute proximal humeral head fracture. Seminars in Arthroplasty: JSES, 2023 Jun 33;(2):209-217.
- Clinical effectiveness of superior capsular reconstruction using teflon felt graft in the elderly for pain relief: A comparison using tensor fascia lata graft. JSES Int. 2023 Jul 27;7(6):2379-2388.

お忙しい中、高岸賞選考、ベストアブストラクト選定、国際論文奨励賞選定にご協力をいただいた、すべての先生に心からお礼を申し上げて、委員会報告と致します。

社会保険等委員会

担当理事 高瀬 勝己 委員長 望月 智之

令和5年8月9日に令和6年度診療報酬改定のための厚労省ヒアリングを橋口宏元担当理事とともにWebにて受けました。①肩腱板断裂手術（腱板断裂5cm未満、関節授動術を伴う）（関節鏡下） ②肩関節唇形成術（肩甲骨烏口突起移行術を伴う）（関節鏡下）と2つの術式のプレゼンテーションを行い、質疑応答を通し上記術式の保険収載を要望致しました。改訂結果は令和6年1月中には発表される予定です。

このニュースレターが発刊されるころには、改訂結果が提示されておりますが、いずれにせよ2年後令和8年の新規収載術式の検討を社会保険等委員会で行っていくこととなります。引き続き会員の先生方のご支援ご協力のほどよろしくお願いいたします。

教育研修委員会

担当理事 菊川 和彦 委員長 後藤 英之

今年度の教育研修委員会の活動内容について報告致します。

第15回教育研修会を第50回日本肩関節学会開催期間中に開催しました。早朝の開催にも関わらず多数のご参加を賜り誠にありがとうございました。講演のハンドアウトは会員専用の学会ホームページから入手できるようにしていますのでご活用ください。

第15回教育研修会 会場：京王プラザホテル 第2会場

教育研修講演1：10月13日(土)7:00～8:00(日整会単位：2、9, R(リウマチ))

座長：後藤英之先生（至学館大学健康スポーツ科学科）

演題1：肩関節周囲骨折の診断と治療

演者：国分毅先生（神戸医療センター 整形外科）

演題2：人工肩関節置換術の基礎と実際

演者：落合信靖先生（千葉大学大学医学部 整形外科）

教育研修講演2：10月13日(土)8:00～9:00(日整会単位：9, 13, Re(リハビリ))

座長：菊川和彦先生（マツダ病院 整形外科）

演題1：肩のスポーツ障害の診断と治療

演者：山崎哲也先生（横浜南共済病院 整形外科）

演題2：肩のリハビリテーション

演者：川崎隆之先生（日本相撲協会診療所）

また、第7回日本肩関節学会キャダバーワークショップを2023年11月25日(土)、26日(日)に、名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンターにて開催致しました。参加者は関節鏡コース6名、切開手術人工関節コース6名の合計12名で、関節鏡視下手術、直視下・人工関節手術コースをそれぞれ3テーブルずつ、6人の講師によって手術手技の実習指導をして頂きました。また、11月25日(土)18時00分から第7回肩関節疾患手

術手技フォーラムを名古屋市立大学会議室 (JPタワー名古屋5階) にて開催し、講演会および企業展示をライブ配信併用で行いました。参加者の皆様からは有意義であったとご好評をいただきました。



第7回キャダバーワークショップ・肩関節疾患手術手技フォーラム

実施責任者

- ・ 吉田雅人先生(名古屋市立大学整形外科)

講師

- ・ 内山善康先生(東海大学 整形外科)
- ・ 菊川和彦先生(マツダ病院 整形外科)
- ・ 後藤英之先生(至学館大学健康スポーツ科学科)
- ・ 小林尚史先生(八王子スポーツ整形外科)
- ・ 酒井忠博先生(トヨタ記念病院 整形外科)(五十音順)

参加者の皆様

- ・ 植田晋太郎先生(名古屋徳洲会総合病院 整形外科)
- ・ 織田和樹先生(京都大学大学院)
- ・ 楠瀬正哉先生(神戸大学 整形外科)
- ・ 白尾宏朗先生(日本医科大学付属病院 整形外科)
- ・ 千住隆博先生(佐世保共済病院 整形外科)
- ・ 高木祥有先生(長岡中央総合病院 整形外科)
- ・ 高澤修三先生(亀田メディカルセンター 整形外科)
- ・ 武内優子先生(トヨタ記念病院 整形外科)
- ・ 波多野泰三先生(東京北医療センター 整形外科)
- ・ 林伸先生(神戸医療センター 整形外科)
- ・ 米澤圭祐先生(帝京大学医学部附属病院 整形外科)
- ・ 和才志帆先生(東海大学医学部外科学系 整形外科学)
(五十音順)

ワークショップの開催に当たっては、名古屋市立大学統合解剖学教室の皆様をはじめ、同大学整形外科学

教室、運営事務局のNPO法人メリ・ジャパン様など、関係の皆様のご多大なご協力、ご協賛を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今後も教育研修委員会は会員の皆様の肩関節診療のお役に立てるよう研修会やワークショップなどの教育活動を行って参ります。今後ともご指導、ご意見を賜りますようお願い致します。

学術委員会

担当理事 高瀬 勝己 委員長 藤井 康成

2022年度における学術委員会の活動内容としては、前年に行いました本学会員の先生方を対象としたアンケート調査「腱板広範囲断裂に対する手術療法」のデータを集計し、第50回日本肩関節学会において担当者である山門浩太郎先生に発表していただきました。その内容は現在雑誌「肩関節」に投稿中です。また、後述する二つの研究テーマに対し、担当委員を中心に主としてweb会議を通して委員会内で検討を重ね、アンケート調査を実施すべく準備を行なっております。

一つ目は、腱板脂肪変性の評価に関する調査です。MRI画像におけるGoutallier分類の信頼性に関して、日本の肩関節外科医を対象に調査を行います。現在、MRI画像を提供していただく千葉大学での本調査に対する倫理審査の承認が得られ、画像ファイルのデータ作成も終了しました。また、ネット上での回答フォームも完成いたしました。

まずはターゲットを棘上筋に絞り、近日中に学術委員会内で2回のトライアルにて検者内相関を確認した後に、調査対象者を広げて本格的な調査に入る予定です。

最終的には、1) ターゲットを他の腱板まで広げていく、2) 調査対象を肩学会員全員まで広げる、など協議しながら、調査を進めていきたいと考えております。

二つ目は、肩甲骨関節窩の離断性骨軟骨炎 (OCD) です。投球スポーツや体操選手で見られる非常に珍しい疾患で、渉猟できる範囲で疫学的調査は世界的にもありません。

日本における関節窩OCDの疫学調査を肩関節学会員を対象に行い、その発生件数や治療法など検討していきたいと考えております。現在、担当委員を中心にアンケートフォームを作成中です。

フォーム完成後は、理事会の承認を得て皆様にご協力をいただくこととなります。おそらくアンケート調査の実施は次年度になると思われませんが、何卒ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

アンケート調査以外の作業として、例年と同様ですが第98回日本整形外科学会学術総会運営事務局からのシンポジウム案の作成依頼があり、委員会内で協議を行なっている最中です。さらに本年は、第39回日本整形外科学会基礎学術集会運営事務局よりシンポジウム案の作成依頼もあり、学術総会と併せて委員全員で対応しております。

学術委員会は、本年度も代議員数の増員に伴い新たなメンバーが加わり、総勢13名となりました。構成員の平均年齢も若返り、委員長の私が恥ずかしながら最高齢者となりました。ただ、委員長としては非常に力足らずで、議事進行や調査結果の取りまとめなど、委員の皆様のお力をいただきながら何とかマネジメントを行なっております。学術委員会を少しでもブラッシュアップさせながら、多くの興味ある調査を発案し実行できればとの思いを抱きつつ、委員会一丸となって調査に邁進していく所存であります。

学術委員会の活動に対しまして、今後も会員の皆様のご厚情ならびにご協力を賜りますようお願い申し上げます。

広報委員会

担当理事 田中 栄 委員長 夏 恒治

広報委員会の業務としては、2023年はニュースレター19号、20号を発刊しました。2024年も同様に年2回(21号、22号)のニュースレター発刊を行います。今回は21号になりますが、新たに製作を株式会社C4メディアに委託し、デザインも一新しました。

またニュースレターの発刊業務と並行して新ホームページ立ち上げ業務を行ないました。2023年12月公開を目指しておりましたが若干作業に遅れが出ております。申し訳ありません。2023年度中には公開できると思います。こちらも株式会社C4メディアに製作、管理を委託しております。

新ニュースレター、新ホームページに関して、引き続き魅力に溢れたより良いものを目指して参りますのでみなさまの忌憚なきご意見の程よろしくお願いたします。

今後は日本肩の運動機能研究会のホームページも含めてホームページのコンテンツを充実させる業務を行なっていきます。会員の他にも非会員の医師・スタッフ向けのコンテンツを充実させ新会員の獲得に繋がるように、また医療従事者以外の一般の方に向けて肩関節疾患の理解を深めてもらえるようなコンテンツを作成していく予定です。

会員のみなさまからも新コンテンツのアイデアやご意見がありましたらいつでもご連絡ください。コンテンツ作成メンバーに加わりたい方からのご連絡もお待ちしております。肩関節は自由度の大きい関節ですが、日本肩関節学会のホームページも自由度の大きいホームページを目指したいと思いますので、特に若い方からの型に嵌まらない斬新なアイデアを是非ともよろしくお願いいたします。

財務委員会

担当理事 伊崎 輝昌 委員長 酒井 忠博

財務委員会は担当理事の橋口宏先生が退任されることになり、伊崎輝昌先生が担当理事に就任されました。引き続き経験豊富な委員の皆様のお力をお借りして、出来る限り財務の改善に尽くしたいと存じます。

2022年度の財務報告としては準会員1号及び2号の入会が堅調に推移した事、前年度の未納者の入金実績が良好であったことにより増収となりましたが、2022年に入ってから急激な円安、物価高の進行により、印刷費などの諸費用の増加に加え、JSES購読料の支払額が大幅に増加したため、-106,222円の収支となりました。決して大きな減収ではありませんが、減収であることには変わりなく、長期的な観点から見ると財務の悪化が懸念されます。昨年もお示しましたように、正会員、準会員1号の年会費15,000円にはJSESオンライン購読料が含まれており、円安による差額により来年度の予算ではJSESオンライン購読料が255万円程度の増額となっております。

社員総会においても、今後このような円安が長期化すれば、新規事業に充てる予算捻出のために年会費値上げを考慮せざるを得なくなるという懸念をもっていることを述べさせていただきました。財務委員会としては引き続き、役員・代議員の各種会議のWeb開催を奨励するなど、経費節減の努力をして参りますので、会員の皆様方におかれましては引き続き御理解、御協力を御願いたしますと共に、財務改善のため、さらなる会員増加に御協力頂けますよう、よろしくお願いいたします。

定款等運用委員会

担当理事 伊崎 輝昌 委員長 西中 直也

当委員会からの報告は10月の社員総会で承認された以下の3つの規則・会則の変更事項です。

1. 日本肩の運動機能研究会会則案 第4章 世話人等 第9条 世話人等の資格について
これは昨年の社員総会で承認予定も問題点が指摘され、本年に持ち越しとなりました。
→準会員1号であること。ただし、準会員制度発足以前の非医師である正会員は含まれる。
との修正案が承認されました。研究会会員、研究会運営委員会の皆様には多大なご迷惑をおかけしました。
2. 日本肩関節学会役員選出規則第2条 理事の任期規則の変更について
これは、理事の任期は現在連続3期までとなっているものを変更が必要との理事会での承認事項です。
理由として若くして理事になった人が、長く活躍できるようにしたい。さらに現行では理事長としては2年
のみしか出来ない可能性が高いため、2年以上の任期を可能にしたい、との内容でした。以下の如く変
更案を作成し、内容と文言ともに活発な議論の後に承認されました。

「3期連続して理事であった正会員は被選挙権を有しない。ただし、3期連続後1期以上理事でない期間
を経たものはその限りでない。前項の規定にかかわらず、2期連続理事を務め3期目に理事長である理
事については4期目に限り被選挙権を有する。」

これによって、学会の活性化が進むことを大いに望みます。

3. 学会賞(高岸直人賞)選考規定 別則1の一部変更について
こちらは特に質問もなく承認されましたので、直接ホームページなどで確認をお願い致します。

今後も既存の規則等の改定や、新たな規則等の策定にしっかり対応していきたいと思えます。どうぞよろしく
お願い致します。

リバー型人工肩関節運用委員会

担当理事 菊川 和彦 委員長 山門 浩太郎

リバー型人工肩関節 (RSA) ガイドラインですが、一部改正され (2023年6月)、日本整形外科学会会
員専用ページよりダウンロード可能となっております。(リバー型人工肩関節全置換術適正使用基準：
<https://www.joa.or.jp/member/topics/2020/files/20200507.pdf>)

今回の改訂では、実施医基準の経験症例数が腱板断裂手術実施医基準 (A基準) と上腕骨近位部骨折実
施医基準 (B基準) の両方で緩和されました。両基準ともに、人工関節の経験数に、術者だけでなく助手とし
ての参加数もカウント可能となっています。ただし、「助手」は、第一助手に限定されると解釈されます。

人工肩関節全置換術の術者もしくは助手、

人工骨頭置換術の術者もしくは助手、
リバーズ型人工肩関節全置換術の助手の合計 10例

(また、肩腱板断裂手術の経験数と上腕近位部骨折に対する観血的整復固定術は、術者としての30例のまま、助手としての経験はカウントされません。)

一方で、RSA使用にかかわるガイドライン運用の厳格性については基本的に変化することはありません。今後もガイドラインを遵守いただけますようお願いいたします。また、2013年5月に承認された初版からは、内容と表現がかなりかわっておりますので、この機会に、新ガイドラインをご一読されることをお願いいたします。

選挙管理委員会

担当理事 田崎 篤

2023年度は、代議員選挙および第53回学術集会会長選挙を行いました。以下の通り決定しました。

以下敬称略

第53回日本肩関節学会学術集会会長

学術集会会長選出規則8条

- ・ 北村歳男(熊本整形外科病院)

代議員

代議員選出規則第4条2推薦基準(1) - (3) 該当者

- ・ 芝山雄二(滝川市立病院)
 - ・ 笹沼秀幸(自治医科大学)
 - ・ 杉森一仁(富山赤十字病院)
 - ・ 藤澤基之(久恒病院)
 - ・ 光井康博(百武整形外科)
 - ・ 木田圭重(京都府立医科大学)
 - ・ 森川大智(順天堂大学)
 - ・ 門馬太輔(北海道大学)
 - ・ 一ノ瀬剛(高崎総合医療センター)
- (立候補順)

50年史編纂委員会

担当理事 菊川 和彦 委員長 国分 毅

日本肩関節学会の50年史は、第51回日本肩関節学会学術集会開催に合わせて日本肩関節学会ホームページ上で公開の予定です。50年史サイトでは、40年史に新たな10年での出来事（日本肩関節学会の社団法人化、日本肩の運動機能研究会の発足、リバー型人工肩関節置換術の本邦への導入など）を組み込んでいく旨、20号のニューズレターで報告させていただきました。

現在、原稿の執筆をお願いさせていただきました先生方よりほとんどの原稿が届きまして、委員による校正もほぼ終了いたしました。今後、2024年3月ごろを目標に、ご執筆いただきました先生方への最終のご確認、理事会での承認を経て、まずは日本語版を完成させる予定です。ご執筆頂きました先生方に深謝いたします。

今後、英語版の作製作業に移って参りますが、皆さまのご協力もあり現在のところ50年史作製は予定通り順調に進んでおります。第51回学術集会での日本肩関節学会50年史の公開を、皆さま楽しみにしてお待ちください。

用語委員会

担当理事 田中 栄 委員長 佐野 博高

用語委員会は2022年に発足した新しい委員会で、田中栄担当理事、今井晋二アドバイザーのご指導の下、肩関節に関わる医学用語の定義や使い方について検討を行っています。

当委員会では、現在肩関節可動域測定法の改訂作業に取り組んでいます。現行の「日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会制定・関節可動域表示ならびに測定法」には、椎体番号を用いた肩関節内旋可動域の測定法や、肩関節屈曲90度（いわゆる3rd plane）における内外旋角度の測定法が収載されていないなど、実際の臨床に十分即していない点が複数みられます。今回、これらの表示・測定法を追加収載するとともに、内転角度の表示・測定法についても修正を加えた改訂案を作成し、9月の本学会理事会においてご承認をいただきました。今後は、年明けをめどに学会のweb site上に公開し、会員の先生方から広くご意見を募りたいと考えています。それらを基に更に検討を加え、最終的に日本肩関節学会による改訂案としてまとめていく方針です。

また、2023年7月31日を締め切りとして、定義や使用法について疑問のある肩関節に関する医学用語を募集しました。会員の皆様から多くのご応募をいただきましたことを、この場をお借りして改めて深く御礼申し上げます。2023年8月28日にはweb会議を開催し、今回ご応募いただいた中から、五十肩、白蓋、サイレント・マニプレーションの3つの用語を、審議対象として選定させていただきました。今後、当委員会において文献調査やアンケート調査などを実施し、検討を進めていく予定です。また、審議内容については、会員の皆様の正確な用語使用に資するよう、日本肩関節学会のweb siteやニューズレターなどで適切にフィードバックしていきたいと考えています。

会員の皆様におかれましては、こうした当委員会の活動に、引き続きご理解・ご協力下さいますようお願いいたします。

事務局からのお知らせ

2024年が始まり、早1か月が過ぎ、2月になってしまいました。

2023年度年会費の請求書を12月にお送りいただきましたが、早々と多くの先生方からご納付をいただいております、ありがとうございます。

2023年度は新HP公開、50年史の公開に向けて、色々な情報の確認、技術的な内容など不慣れな部分や事務局の確認が難しい部分など、お忙しい先生方のご協力をいただいております。この場を借りてお礼申し上げます。

事務局から定期的に会員の先生方へのご連絡をお送りしておりますので、メールアドレスやご勤務先、郵送希望先が変更になった場合は、是非、会員専用ページでの変更または事務局までお知らせくださいますようお願い申し上げます。

編 集 後 記

広報委員会 三宅 智

ニュースレター第21号を最後までお読みいただきありがとうございます。皆様のお力添えを持ちまして、本号も大変充実した内容となりました。担当理事の田中先生、委員会アドバイザーの北村先生、委員長の夏先生、事務局の川村さん、広報委員会の先生方、そしてご執筆いただきました全ての先生方に厚く御礼申し上げます。

本学会の発展には、若い医師の力が必須であります。文献検索や医学書閲覧などまでスマホでこなす彼らを惹きつけるためには、肩関節学会のホームページの内容の充実化やアクセスの向上は重要です。学会員の先生方には、現在ホームページ改革に尽力している広報委員会の先生方への応援と助言を賜りたく存じます。ホームページ内のこのニュースレターもさらに魅力的なものになるように努力して参ります。

今回、編集責任者だった小生の力不足で多くの先生方にご迷惑おかけしました。この場をお借りして委員の皆さんにお詫び申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人日本肩関節学会広報委員会

田中栄（担当理事）、夏恒治（委員長）、新井隆三、大前博路、梶博則、梶山史郎、土屋篤志、西中直也、堀籠圭子、美船泰、三宅智、村成幸、北村歳男（アドバイザー）＜2023年12月時点＞

発行：一般社団法人日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田3-13-12三田MTビル8階 株式会社アイ・エス・エス内

TEL: 03-6369-9981 / FAX: 03-6369-9982

E-mail: office@shoulder-s.jp / URL: <https://www.j-shoulder-s.jp/>